

白金菝

THE
SHIROGANE
YOSHI



2025/4/18 の白金菝



2025/4/5 布施弁天チューリップ畑



2025/4/3 花まつり（ジブリアニメ）



2025/4/3 住職・ゴホンゾと

柳川の春や水路に音もなく
青麦のつんつん伸びし風情かな
まとひ来し朧をこぼす灯の下に
佛頭に渦巻きいくつ陽炎へり

璃子（穴まどひ平 21）	高志選
”（ ” ）	”
”（ ” ）	みち選
”（ ” ）	”

定例会 (5月の兼題…卯の花、夏場所)

五月十六日 (金) アビスタ第三会議室 12〜15

六月二十日 (金) アビスタ第五会議室 12〜15

七月十八日 (金) アビスタ第五会議室 12〜15

四月句会 (‘25/4/18 (チューリップ、仏生会灌仏会) 太字は当日句

乳母車より石罫玉かぎりなく

比叡より大顔キヤラも灌仏会

花の墓地抜けて来たりし仏生会

チューリップ畑の道の三和土たたきかな

ぺんぺん草花咲く畝のチューリップ

ネモフィラの畑に紫雲英げんげの花残り

知らぬ間にパソコン直る四月馬鹿

甘茶掛く仏ぶつより大き柄杓持ち

花御堂梵妻見立ての庭の花

セーラーの女めの子がポーズチューリップ

二か月の嬰兒ややの寝かさされ花筵

霾曇よなぐもり 対向車両ライトつけ

光成高志

光みち

浅野正美

チューリップ色織り成して広がりぬ

満開のさくらを背にし写真撮る

来年も花見約束幼なじみ

仏生会読経ひびき香こう薫る

梨の花白き花びら枝の先

チューリップ並んで揺れて笑うこと

佐々木由紀子

チューリップ並んで咲いて赤と白

チューリップ黄色も咲いてにぎわって

チューリップ等間隔に植えられて

チューリップ花びら一枚おとしたり

薄雲が天空おおひ地には花

どこまでも桜さくらと続く道

山下寿幸

紫木蓮雲無き空に咲きそろふ

故郷の田舎道筋辛夷咲く

潮香り呼子朝市春愉し

寺通り上り来たりし花祭り

通い道日に日に変わるチューリップ
花椿曇り空には美はしけり

山尾万世遊

昨夜芸妓山湯に遇ひし朝桜

ピンヒールの叔母桜折り枝とする

桜湯や飲み干す叔母の京言葉

叔母と手を組みカンカン娘花の塵

山の湯やコンパニオンも姥桜

163号選句一覽 ○字は選者の頭文字。

◇は特選

◇の◇乳母車より石鹼玉かぎりなく

チューリップ色織り成して広がりぬ

チューリップ並んで咲いて赤と白

◇の◇紫木蓮雲無き空に咲きそろう

◇知らぬ間にパソコン直る四月馬鹿

秀昨夜芸妓山湯に遇ひし朝桜

秀ネモフィラの畑に紫雲英げんげの花残り

比叡より大顔キヤラも灌仏会

寿満開のさくらを背にし写真撮る

チューリップ黄色も咲いてにざわつて

◇の◇故郷の田舎道筋に辛夷咲く
寿幸さんの故郷の唐津の回想詠です。夷咲くの季語が新田次郎並に効果を發揮しています。梅の花より豪華に咲く白い花。

◇の◇甘茶掛く仏より大き柄杓持ち
ピンヒールの叔母桜折り枝とする

花椿曇り空に美はしけり

◇の◇花の墓地抜けて来たたりし仏生会

◇の◇来年も花見約束幼なじみ

来年も又花見しようねと約束した幼馴染。どうか来年も元

気でいますようにという祈りが略されている。花見は隅田川

沿いの櫻並木道と作者の弁がありました。

◇の◇チューリップ等間隔に植えられて

秀潮香り呼子朝市春愉し

◇の◇花御堂梵妻見立ての庭の花

◇の◇秀桜湯や飲み干す叔母の京言葉

◇の◇チューリップ並んで揺られて笑うごと

チューリップ畑の道の三和土たきかな

秀秀仏生会説経ひびき香薫る

◇の◇秀チューリップ花びら一枚おとしたり

◇の◇花祭り寺通りから真栄寺

セーラーの女めの子がポーズチューリップ
秀叔母と手を組みカンカン娘花の塵

◇の◇どこまでも桜さくらと続く道

観光地にとどまらず近所に桜並木はあるものです。何処までもと表

現した桜さくらと表現したところに作者の花への感動が伝わります。

寿へんぺん草花咲く畝のチューリップ

◇の◇梨の花白き花びら枝の先

④ 薄雲が大空おひ地には花

⑤ 通い道日に日に変わるチユリリップ

チユリリップは一日でも閉じたり開いたりするし、日に日に花の様子が変わる。その観察をよくされている句です。

⑥ 二か月の嬰児の寝かされ花筵

生まれて間もない2か月のヤヤコを、花筵に寝かし、

若い母親同士が、花見を楽しみながらお喋りの花に夢中になっている様子が浮かびました。作者も気が気ではなかったと思います。

山の湯やコンパニオンも姥桜

よなぐもり対向車両ライトつけ

俳窓評論纂

*¹³ 朝日俳壇の文章欄、うたをよむ吟行のたのしみ
田丸千種さんの武蔵野探勝の紹介記事が載った。昭和5〜14年まで百回にわたって吟行して句会を行つた記録である。虚子を中心にした20名、多い時は40名のメンバー。水原秋櫻子、高野素十、中村草田男ら錚々たる俳人が吟行記事を書き、月刊の「ホトトギス」に掲載された。これを集めて刊行された虚子編『武蔵野探勝』は今読んでも躍動が伝わる。「野火ゆきて萱倒れゆくあはれかな」（星野立子）は浮間ヶ原で一行は、なんと戯れにマツチを擦って草を焼いている。（昭和6年の話です。真似しないでください！）「川を見るバナナの皮は手より落つ」（虚子）「まさおなる空より枝垂桜かな」（富安風生）「春水に舟あり乗

つて腰かけぬ」（虚子）。『武蔵野探勝』で描かれているのは、「討入の義士の様に」季節を見出さんと、生き生きと野外へ繰り出す探勝俳人たちだ。解放感あり、好奇心あり、未知なるわが句との出会いを求めて、師弟ともども、時間の許す限り、貪欲に句作に励む。百回分の吟行の面白さが理屈抜きで迫ってくる。こんな文字通りの向日性が、時代や風物の違いを越え、二十一世紀の今も我ら吟行派を駆り立てる。以上の記事である。（私が俳句の面白さを知った名著であるので、少しコメントしてみる。この本の初版は昭和十七年五月十五日ホトトギス発行所に於いて 高浜虚子 の書かれた序文があり、巻末に昭和44年十月に書かれた駒沢大学桜井正信の復刊の推奨文が載っている。その前に探勝地名図および一覽表が掲載されている。府中の樺並木の一番から最後百回の鶴ヶ丘八幡宮初詣まで場所と所在地及び執筆者が表になっている。圧巻である。私の興味の引かれたところを紹介すると、手賀沼（S5.18）の吟行、平林寺（S5.11.9）の吟行、それに（S9.6）の印旛沼から成田への吟行である。吟行録の作者はそれぞれ、池内たけし、富安風生、富安風生である。文章と俳句の並びが今読んでいる「おくの細道」のごとくよくマツチして読んで風景がすぐ浮かび、こういうのをよく描写されている俳文というのであろう。私は当地に来て俳句に親しんで方々仲間と吟行をして俳句を書き留める楽しさ面白さそしてものあはれを知る手掛かりになることを知って今もこの文章をキーボードで打ってゐる楽しさつたらない。右の手賀沼印旛沼成田山それに平林寺にもよく行って親しんだ所。吟行

録を読んでその場の状況が想像され、それが私の実際のその場での思い出と重なるので楽しく思えるのだ。初読の時一番感心してあわいいなと思ったのは、平林寺での帰りの車の中で先生は言われた。「やっぱりあの土手に休んでゐた時が一番気持ちよかつたですね」で終わっているところだ。土手で休んでいるところをそのまま書いてみると以下である。さつき来た門前の道をぶらりぶらりと川越街道の方へ帰る。「茶の花を手折り野菊を摘み行きぬ」（富士子）。道の片側に沿ふて伊豆堀が流れてゐる。堀のへりは落葉し尽くした桜並木である。堀を境して雑木林。また道の他の畑―甘藷蔓をたぐねてある畑、大根の畑、枯れかかつた桑の畑など。そして畑の向ふには、やはりまだらに色づいた栗や榎や橡などの雑木林が横たはつてゐるのである。これ等の雑木林こそは誰もが知つてゐるやうに独歩が「武蔵野」の中であんなにも賛美した林なのである。「……林の奥に坐して四顧し、傾聴し、睥視し、黙想す……」と書いたあの林なのである。（中略）これこそ今の武蔵野の特色であると云つて熱愛したあの林なのである。その林の裾は今われわれの歩いて居るほとりに近く、始まつたり終わつたりしているのである。（中略）「竜胆はかくして枯れて行くべきか」（蚊杖）「路落葉檜の葉といふ栗といふ」（霞人）われわれはかういふ雑木林の眺めを恣まにそのままにしながら草の土手に腰を卸して休んだ。余あまのやうな柔らかい土手の草は美しく紅葉している。「腰下ろす未枯草の暖かさ」（虚子）「道傍に並び憩ひぬ草紅葉」（花蓑）「道端にみんな憩ひぬ草紅葉」（たけし）「未枯に下駄をそろへて坐りけり」（富士子）。（下略）そして先に書いた、帰りの車の中で先生は言われた。「やっぱりあの土手に休んでゐた

時が一番気持ちよかつたですね」で終わっている富安風生の文章。氏は「まさおなる空より枝垂桜かな」の作者である。今も市川真間弘法寺くほうじ境内にある枝垂れ桜である。句碑も

無論ある。私は市川駅から手児奈通りを北上してこの弘法寺くほうじまでよく歩いたところである。気が向いたらさらに歩いて和洋女子大の高層の学生食堂まで行つた。すぐ近くが里見公園であり、川べりにでると広い江戸川沿いの道にでるのであった。こういう文章を見た世間の人は、何をぶらぶら歩いて遊んでいるのだ、馬鹿な連中だと決めつけるに違いない。

＊^{4.13}朝日探究と未来 面白そうをはぐくもう の社説；正三角形をいくつかに切つて並べ替え正方形をつくる。四つでできることは知られていたが、三つで可能か否か。120年以上謎だつた難問を北陸先端科学技術大学院大学と米マサチューセツ工科大学の数学者が「できない」と証明した。切つたピースの辺と頂点の関係から連立方程式を作り、三つで可能と仮定すると矛盾が生じると示したという。やっぱり難解だが、少しわかつた気になる。こうした「裁ち合わせ」パズルは、江戸時代にも親しまれた。なぜ、気鋭の学者が挑戦したのか。北陸先端大の鎌田斗南助教は「非常に巧妙で美しい。魅力を深く知りたいと思つた」と話す。イタリアの研究チームは「最高のゆで卵」の作り方を発表した。熱湯が入つた鍋と30℃の水の器を用意し、卵を2分ごとに移して8往復させて計

32分。ぱさぱさにもならず、半熟でもなく仕上がる。一流シェフが、黄身と白身をわけた調理で理想的な食感を実現する、と聞いた学者が「卵を割らずにできるか」と流体力学の技法をもとに挑戦したそう。面白い。(中略)若い才能が安心して自由に研究できる環境が必要だ。課題解決に取り組む専門家の応援と同時に、遠回りでも「面白そう」から始まる探究を見守りはぐくむ。まだ、日本にもその余裕はあるはずだ。(以下略) (以前日本芸術委員会の会員任命の問題が起こってその解決をみていない現在こういう意見は未だに大切なのでここに敢えて取り上げた。)

* Be テレビ 2.15 自己満足じゃ絶対ダメ の見出しにて「プライベートバンカー」で主演の唐沢寿明のインタビュー記事。この見出しは俳人にも通用する。役者としての自己主張やプライドは排して生きてきたという。「僕たちの仕事はエンターテインメントだから、自己満足じゃ絶対ダメ。極論を言えば、自分を犠牲にしてもお客さんを楽しませないといけない。作品が面白くなるなら、そんなものは早く捨てた方がいいよね」・・無私の境地にいたること。写真付。(エンターテインメント(Entertainment)とは人々を楽しませる娯楽や余興のこと)

芭蕉の軽み以後 (114)

光成高志

先におくのほそ道の目的は松島と出羽三山巡礼にあつたと結論付けた。そこで草加・春日部・栗橋・間々田・室の八島を通り日光・遊行柳・殺生石と行く行程を飛ばし、いきなり6.3の羽黒山に登るを鑑賞してみる。3.27から65日目のことである。本文は左に全文を示した。6.3は陽暦では7.19。曾良日記には「三日天氣吉 新庄ヲ立つ。(略) 申ノ刻(午後5時ごろ) 近藤左吉(図司呂丸)ノ宅ニ着」とある。この圖

司曾良佐吉は曾良日記には近藤左吉とあるからこれが本名である。彼は山伏衣装の染物屋を営んでいた。図司は染物屋という意味だから、芭蕉は図司佐吉と書いたのだ。そして呂丸は彼の俳号でこれより以前に其角・嵐雪より文通により指導を受けていた。芭蕉が羽黒山に来た時、世話をして弟子入りし、「図司呂丸」と名乗った。3年後各務支考かがみしこうが出羽三山まで芭蕉の真似をして訪れたのも芭蕉の旅の目的をこの出羽三山巡礼だとわかっていたからだろう。これは私の推測です。支考は呂丸に会い、酒田市の俳人・伊東不玉いとうふたまを誘つて象潟に遊んだ。呂丸は芭蕉に弟子入りした後、俳諧修業に出るため江戸に出て芭蕉と再会し、『三日月日記』(享保15年(一七三〇)8月、『三日月日記』支考編:「」で呂丸と検索すれば全

文が見られる。芭蕉の追悼文。)の草稿(完成は芭蕉没後なのでこの時は下書きの草稿だった)を芭蕉から渡される。呂丸は芭蕉からそれを渡されるほど認められていたということだ。呂丸は伊勢参りのために西に向かい、その後京都へと上洛するが、1月の半ばから病に倒れ、元禄6年(二六九三)2月に客死した。客死した折、芭蕉や酒堂、支考の追悼句が残されていて皆に愛された人であった証しである。地元の稻荷神社に凶司呂丸句碑があるそうである。以上、本文の最初の「圖司ずし佐吉といふものを尋たずねて」までを解説した。

六月三日、羽黒山に登る。圖司ずし佐吉といふものを尋たずねて、別當代會覺阿闍梨に謁す。南谷の別院に舍やどりとして、憐愍れんみんの情じようこまやかにあるじせらる。四日、本坊において俳諧興行有難や雪をかほらす南谷。

五日、権現に詣。当山開闢かいびやく能除大師のうじよだいは、いづれの代よの人と云事を知らず。延喜式に「羽州里山の神社」と有。書写、「黒」の字を「里山」となせるにや。「羽州黒山」を中略して「羽黒山」と云にや。出羽といへるは、「鳥の毛羽を此国の貢に献たてまつる」と風土記に侍はべるとやらん。月山、湯殿を合あて三山とす。当寺武江東叡ぶかうとうえいに属して、天台止観ていがんの月明らかに、円頓融通えんどんゆうつうの法

のりの灯ともしびかゞげそひて、僧坊棟をならべ、修験行法を励し、靈山靈地の験効、人貴たつとび且かつ恐る。繁あ栄長とこなえにして、めで度たき御山と謂つべし。八日、月山にのぼる。木綿ゆうしめ身に引かけ、宝冠ほうかんに頭かしらを包、強力ごうりきと云ものに道みちびかれて、雲霧うんむ山さん気きの中に、氷雪を踏ふみてのぼる事八里、更に日月行道にげつぎやうどうの雲関うんかんに入かたあやしまれ、息絶身いきぜつみこえて頂上に臻いたれば、日没にちぼつ月頭げつあはる。笹を鋪ふしき、篠しのの枕まくらとして、臥ふて明あるを待。日出ひでて雲消うみきゆれば、湯殿に下くだる。谷の傍かたわらに鍛冶小屋と云いうあり。此国の鍛冶、靈水を撰えらびて、爰こゝに潔けつ斎さいして劍けんつるぎを打、終ついに「月山」と銘を切きて世に賞せらる。彼かの竜泉りゆうせんに劍を淬すにらぐとかや。干将かんしょう・莫耶まがやのむかしをしたふ。道に堪能かんのうの執しゅうあさからぬ事ことしられたり。岩に腰かけてしばしやすらふほど、三尺ばかりなる桜のつぼみ半ばひらけるあり。ふり積雪の下に埋くて、春を忘れぬ遅おそざくらの花の心こゝろわりなし。炎天えんてんの梅花ばいか爰こゝにかほるがごとし。行尊ぎゆうそん僧正そうじやうの歌の哀あはれこゝに思おもひ出でて、猶なほおまさりて覚さゆ。惣そうじて、此この山中の微細みづかい、行者ぎやくの法式ほふしとして他言たごんする事を禁かず。仍なほよつて筆ふでをとめて記しさず。坊に帰れば、阿闍梨あせりの需もとめこゝに依よりて、三山順礼さんざんじゆんれいの句々短冊くくたんさふに書。

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峰いくつ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山銭ふむ道の泪かな

曾良

別當代會覺阿闍利と云うのは、役職と名前とその位を續けて書いた物で、一々説明しなければわからない。別当は一山の主権者であるが、其の別当は東叡山、つまり上野寛永寺の重職にある院家から補任されると定められたが、別当は羽黒には赴任せず、名代の者を遣わして事に当たらせた。それが別當代である。會覺えがくが名前、阿闍梨は阿闍利とも書く梵語(サンスクリット語)（梵語）は、古代インドで使われていた言葉）天台・真言・律宗における高位の職名。高位の僧なので謁すという対面の文字を使った。曾良日記によれば三日にはまだ會覺に對面していない。翌4日の昼であるが、対面までには大石田の高野一栄より紹介状を呂丸に託して本坊（別院の宿坊）に通じるようにしてもらい、會覺の計らいによつて南谷の別院に宿泊できた。南谷は羽黒山の中腹にある台地で高陽院紫苑寺という別院があった。芭蕉はここに泊った。岐阜の「己百きはひはくに逗留中の句「やどりせん藜の杖になる日まで」の宿りを舍りという名詞に「す」をつけて動詞として用いたもの。「尿前しとまえの関」の章に「封人の家を

見かけて、舎やどりを求む」とありこれと同じ用例である。次の「憐愍れんみんの情じょうこまやかにあるじせらる」はあわれみの情をねんごろにこめて、もてなさる、という訳。先に引用した『奥細道菅菰抄すがもしよ』に憐愍は二字ともあわれむと読む。涅槃経ねはんぎょうに憐愍一切衆生れんみんト云いえり」とあるのを引用して、あるじが仏者であるから、仏が一切の衆生をあわれみ給う心をもつて、という意味で憐愍れんみんという仏語を用いた。「あるじせらる」はもてなされる。「あるじ」は主人ともてなし（饗）の意味がある古語。枕草子に「すさまじきもの」（おもしろくなく感じるもの）に「方違へに行きたるに、あるじせぬところ」という文がある。方違えのために出かけて行つたのに、もてなしをしない所ということ、主人として客を迎えてもてなすこと。饗応のこと。四日、随行日記に「天氣吉、昼時、本坊へ蕎麦切ニテ被招、會覺ニ謁ス、並南部殿御代參ノ僧淨教院江州圓入りニ會ス、俳表計はかりニテ帰ル」とあり、俳諧興行（連句の一座を催すこと）は表六句が出来たばかりで帰った。5日に一折に満ち、9日になつて俳終る。「有難や雪をかほらす南谷」（翁）がその時の芭蕉の発句。「住程人のむすぶ夏草なつぐさ」（呂丸）、「川船のつなに蛸を引立て」（曾良）以下略。連衆は芭蕉・呂丸・曾良・釣雪つゆせつ・珠妙し

ゆみよう・梨水りすい・圓入えんにゆう・會覺の八吟歌仙、附七句。芭蕉の発句の季語は「かほらす風」「かほらす南」で、風薫る、薫風、南薫を利かせたもの。現代でも薫風は夏の季語。元は蘇東坡の詩の古文前集に（人ハ皆炎熱ヲ苦シム、我ハ夏日ノ長キヲ愛ス、薫風南ヨリ来タリ、殿閣微涼ヲ生ズ…漢文を訓読）がある。夏の季語で特に五月ごろの南風みなみかぜ、黒南風くろなみかぜはえ、青風、風薫るの一連の季語は南の風の気持ちよさを表す季語。芭蕉も愛用したのだ。平井照敏の新歳時記に現代版が載っている。芭蕉のこの発句は、下界の暑熱をよそに涼気をたたえた霊山の清浄感をのべて挨拶としたもので、「有難や」とは直接會覺の好意を謝したものではなく、霊城の尊厳を賛仰したものとよまねばならない（栗田著）。

お便り広場

光成様 いつもありがとうございます。白金葎162号を20部お送り致します。「芭蕉の軽み以後」の方は進んでおられますか。土日の暖かさで梅が二三輪ほころび始めました。いい春にしていきたいと思います！（324 木戸敦子）。（校正は就寝前にベッドの中で行っています。自分の文書なのに暫くすると眠くなり眠ってしまいます。高志 桜が咲き春なのに何か私の心は秋みたいですね。兄三人が亡くなり私が一番年長になりました。考えた

こともなかった子供の頃から兄三人居ることにどれたけ安心の人生でした。今度は残された三人元気でいましようね。高志さんの身体が心配です。どうか無理をせず元気で今の仕事が続かれる事を祈ります。この前の写真私がどこへやったのかさがしても見つかりません。又送ってもらえますか？白金葎読ませてもらいました。思い出もありますね。旧家の跡のつばき咲いてあると思います。その時期皆んな家を出てそれぞれの人生を歩みました。又手紙書きます（42 幸子）。（写真同封して送ります。白金葎毎月送りますよ。健兄に送っていたように。これからは姉妹にそうします。あの椿は木で今頃は花盛りになっていました。ほうしばんの下の家の娘さんが花をくださいと乗られたのを私が登って取ってあげたのを今思い出しました。高志。光成さんいつも白金葎送り頂き有難うございます。藤原秀臣さまのエッセイいつも楽しく拝読させてもらっています。先月の「人間の修練―時間と暇」の欄を、ゆるりと目を動かしました。この中で、今一番大切なのは、誰でも気を使うのは自分の健康だと指摘されておりました。健康に変わるものは何事にも変え難いものですね。自分などはいつも病院通いと、薬漬けで何事もなく過ごしている次第です。4月の句会に次の通り投稿します、何卒宜しくお願い致します（414 寿幸）。おはようございます。花冷えの日が続き花時が長く楽しみました。4月投句（414 正美。お父様へ お誕生日おめでとうございます。二〇二五年もご活躍くださいませ。ご

健康をお祈りいたします。いつもありがとうございます（れ7
 4.14 晶子）。高志叔父さん 敏子叔母さんへ 先日は父の葬
 儀に遠方よりお越し下さいましてありがとうございます。母
 た。13日（日）に四十九日の法要と納骨をしました。母
 の所へ納骨しました。私の家族 智恵子の家族 幸子叔
 母さん 峯子叔母さん のぶ君（従弟）合計25人で賑やか
 に集まり無事済ませることができました。残った私達皆
 んなが無事故で健康で仲良く暮らすことが父への回向に
 なる信じてこれから皆で頑張ります。高志叔父さん敏
 子叔母さんどうか健康に気をつけて元気でいてくださ
 いね。今度は良い事で会える日を楽しみにしています。色々
 とありがとうございまして、 大川由美子 江草智恵子（4.18）

（一）丁寧な手紙とお返し品まで受領。家内から札状が届けられると
 思います。立派な手紙が書ける由美子さんはさすが健兄の娘です。
 智恵子と話す暇がなかったですが、面白い娘さんとお孫さんが居て
 きつと江草さんは楽しみに見守っていることでしょう。）

健兄のこと（2）健兄のことを記憶にあるまま先月に
 つづいて書いて追悼文とします。11歳上の兄であつて、
 若いうちに養子に出られたので接点は多くない。思い出
 すのは幼少期の大家族の中での生活である。B29の空襲の
 時庭に立って空を見上げておられたのは父であつたのか
 兄であつたのか誰も特定してくれなかった。妹の峯子は
 座敷に寝かされて防空壕に避難されなかったのを未だに

恨みに云う。田舎踊りの一団が家に来て座敷で踊つたの
 を近所の皆が見に来てその晩は賑やかであつたのは記憶
 にある。秋祭りでの神輿渡御の時、池堤の坂を行くとき兄
 が美声で音頭を取つて歌われていた。その節は「あらりや
 あこらりやあそういうて・」というもの。その頃であつ
 たか、小学校の校庭で村の若衆による芝居があつて健兄
 は女役を当てられたらしく、炬燵にて女声で練習されて
 いた。私には他の兄が三人いたのだが本誌は俳誌なので
 その関係は書かない。令和三年（二〇二二）十周年記念合同
 句集に私の選にて九句載せた。グラントゴルフでホール
 インワンをされたのが余程うれしかったらしいので、無
 季の「ホールインワン膝の痛さも忘れ走る」という句を選
 んで載せた。私に付き合つて無理に作句されていたらし
 く、最近はできないよという手紙であつた。しかしながら
 弟の私にいつも他人行儀な手紙を頂いた。決して兄貴面
 の文章ではなかつた。九句の中から「子燕の一羽こぼれて
 しまいけり」、「山笑ううしろの山も山笑う」をここに載せ
 て追悼句とします（終）。

我孫子日記

	3/21	句会
	3/27	光会
	3/29	
*1	駅前ク→田→デポ	
	4/3	
*2	灌仏会	
	4/4	
*3	駅前ク（内科）	
	4/5	
*4	あけぼの山	
	4/7	
*5	今井土手花見	
	4/8	
*6	句帳→真栄寺	
	4/14	
	古谷野皮膚科	
	4/18	
	句会	

*1 花の雨泉倉院通りを行く
 2 門入れば白き花桃天王寺
 垣の天菜の花色のペンキ塗り
 比叡山より御本尊来し花まつり
 花御堂向ひ合はせに拝みたる
 鏡鉞（ようはち）の鳴る音記憶花まつり（父の葬儀の）
 鏡鉞（ようはち）の鳴りて始まる灌仏会（みち）
 胸に子を抱（いだ）き甘茶をかける母
 木魚とんくくくと灌仏会
 般若心経最後に唱え灌仏会
 灌仏会帰りに貰ふ地藏飴（みち）
 駅前的一本桜満開に（湖北）
 *3 春靄の消えて駅前通りなる
 駅前の高層ビル群春日差し
 *4 大樺の若葉を透かし日の届く
 ソメイヨシノ札掛けられて花満つる
 大島桜満開本館横に
 満開の桜の映る甃（い）いだたみ
 開き切り喜んでゐるチューリップ
 外織姫てふ雑種の櫻満開
 股挟みしてターザンロープチューリップ
 鯉の池筏花壇のチューリップ
 パンジーを寄せ植え畝のチューリップ

（みち）

パンジーと色を合わせてチューリップ
 パンジーは白チューリップも白畝の列
 チューリップ畝に薺の花咲ける
 よちよちの子の手の先にチューリップ
 バトミントン打ち合ふ下のチューリップ
 チューリップ畑の歩道土埃
 子供とて髪染めてをりチューリップ
 チューリップ畑の隣りはポピー青
 さくら山出店がぐるり花筵
 泣く稚児のほつとらかしの花筵
 *5 蓬繁る上にシートの花見かな
 花筏水路一面流れをり
 花筵下の蓬を摘み帰る
 花の雨水輪を筏の間に付け
 鶯の長鳴き続くどこまでも
 花曇厚く太陽白くなる
 花筏流れ緩やか且確と
 大の字になつて無意識花シート
 *6 触れて見る正真正銘花御堂
 仏生会遅れて着いて経の後
 編集後記
 今月は我孫子日記に張り付けたエクセルの日記表
 のとおり、句会の後はランチおしゃべり会・駅前ク
 （みち）

リニツク・上野での灌仏会の後チューリップ見、桜の花見の後又クリニツクと医者通いがあるので忙しかった。子供たちの話を聞いてゐて、世が動いている、万物流転の思いを新たにした。毎月のことであるが、句作に吟行を欠かさないので余計この思いが強い。人に会って話すとさらにその思い、つまり芭蕉のいう不易流行の思いを強くする。これが嫌なのかと問われれば決してそうではなくむしろ楽しいのだと答える。考えて見給え。物事が動かず変わらないとすると、これほど気味悪いものはなからう。変わるから追っかけて追いかけて面白い人生になるのだ。これからの季節は特に活発になるので追いかけていると追っつかないほど速く変わる。今考えているのは、来週の花見、次の藤の花見、武者人形の飾りと見、鯉幟の見、歳時記を見てみると心急かされる。年甲斐もなく慌てないように自己を失わないように行動しなければと思う。我を忘れるな！

白金葎4月号(通巻163号)誌代一部千五百円(年会費一万五千円)郵便振込口座一〇五二〇一四二二三六一名義シロガ ネヨシ令和七年4月20日発行 編集発行人 光成高志 発行所 〒270-1119我孫子市南新木2-14-17光成方 投句先…メール又はライン)印刷製本 喜怒哀楽書房〒950-0801新潟市東区津島屋七二一九。表紙の題字は嘉悦羊三& 4.19の白金葎&布施弁天のチューリップ畑&灌仏会の写真&璃子さんの句の選